

湖国の文学碑めぐり

歌人木俣修のふるさとの歌「城の町」

本号のテーマの一つが、「高度情報化時代における電子図書館」であるので、湖国の文学碑めぐりも端末機で「木俣修の歌碑探し」をすることから始めた。

インターネット上のサーチエンジン、ロボット系、ディレクトリ系やメタサーチのものなどで、「木俣修」と入力し検索すると、経歴や著書、果ては古書店での販売価格や在庫の有無までも、立所に知ることができる。

「日本の文学碑」という坂口明生氏のホームページに、「日本の文学碑をみてください、父松木貞雄が50年かけて全国を巡りました。データはすべてオリジナルで4000件以上です」とあり、木俣修のところに、北は仙台市の青葉城址のものから、南は福岡県三橋町の「松月」玄関前のものまで、八首が紹介されている。

この八首の中に、「所在地 彦根市尾末町8 彦根市立図書館前」という一首を見つけることができた。

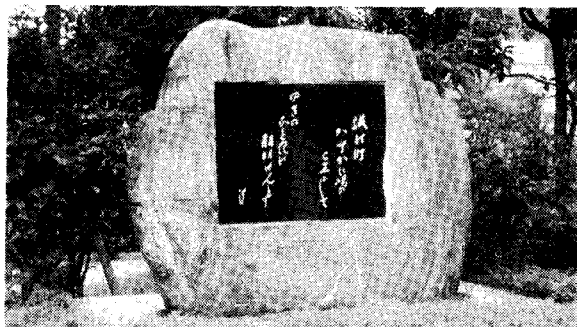
彦根市立図書館の前庭に、愛媛県西条、加茂川産といわれる伊予石に刻まれた立派な歌碑がそれである。

城のまち かすかに鳩のこゑはして ゆきのひと夜の
朝明けんとす 修

この短歌は、ふるさとを詠んだ「城の町」の中の一
首で、第十歌集『去年今年』に、昭和38年から40年
までに詠まれた歌として収録されている。

「この歌はつい二、三年前の冬、久しぶりで郷里彦
根に帰って、城のほとりの旅館に泊まって、雪の夜明
けに濛で啼いている鳩の声をなつかしい思いで聞いた
印象を歌ったものだ。郷里を出てからもう四十幾年に
なるが、私の望郷のおもいの中にはつねに鳩の海の美
しいたたずまいと、澄んだ水のいろと匂いが去来して
いる」（木俣修著『詠嘆の詩歌』、玉川大学出版部、昭
和46）

また、故郷の歌といえば、昭和44から45年の歌集
『谷汲』にも、「彦根」、「膳所」、「湖西巡行」の連作が
みられる。



歌人木俣修は、明治39（1906）年7月28日、滋賀
県愛知郡愛知川町字中宿において、木俣本宗と雅の次
男として生まれ、本名を修二という。彦根藩の城代家
老を勤めた木俣家の末裔だともいわれている。昭和
58（1983）年、76歳までの生涯に、一万首以上の歌
を発表したといわれ、『木俣修全歌集』（明治書院、昭
和60）に、短歌九千余首が収められている。

修は、13歳（大正8年）のころ『赤い鳥』や『金
の船』等に綴り方や児童詩を投稿し、鈴木三重吉や北
原白秋の推奨をうける。大正10年、滋賀県師範学校
に入学、大津市石場の寄宿舎に起居、国語教師坂上一
郎より課外の文学講義をうけ、かたわら歌集類を読ん
で作歌につとめる。

大正15年、滋賀県師範学校を卒業した。このこと
は、滋賀大学教育学部同窓会『会報』（第51号、平成
12年11月発行）の会員名簿に、木俣修二の名が見ら
れる。

大正15年、東京高等師範学校文科第2部国語・漢
文科に入学。昭和3年、北原白秋の世田谷若林の家を
訪ねて、はじめてその聲咳に接する。その後、白秋に
認められ同氏に師事し、短歌の道を歩む。また、白秋
氏亡き後は、その後継者の一人として活躍する。東京
高等師範学校を卒業し、宮城師範や富山高校の教師を
勤め、昭和女子大学、実践女子大学の教授などを歴任
した。宮中に於ける御用掛として歌会始の選者を長く
勤め、昭和48年には紫綬褒章を受けている。昭和40
年6月には、本学教育学部で講演会も開かれている。

「城の町」の歌碑の前の「顕彰碑」の最後に、「この
たびの歌碑は先生のご功績を記念するのみでなく、わ
れらが郷土近江の大きな誇りであり同時に後進への励
みともなることと信じてやみません。木俣修は、この
歌碑建立の直後、昭和五十八年四月四日歿、享年
七十六歳 昭和五十七年 秋立
木俣修先生歌碑建設委員会」と結ばれている。

ここでは、「電子図書館」とは一番縁の遠い「叙情」
を表現する短歌を、題材に採り上げてみた。

検索データのような電子化情報には、電子化媒体な
らではの特質があり、「歌集」のように冊子体には、
冊子体であるがゆえの特質があって、図書館では、そ
れぞれの機能や目的等をふまえた、全体としての図書
館資料の収集、整備が、今にも増して望まれるところ
であろう。

雪の夜明けに、鳩の声 かいつぶりの声を聞く風情
をも楽しみたいものである。

（図書館専門員 天谷真彰）